

おにゃんに

株



カラスは困っていた。

何故なら、今丁度自分がそちらに飛び移ろうとしていた塀の上に、一匹の野良猫がどこからともなく出現したからだ。

それは白地に茶色と黒のぶち模様のある猫だった。

あちこちで餌をもらっているのか、身体はまん丸に太っていて重そうだ。先程塀の上に飛び乗った時も、しぐさがひどく不恰好だった。

見た目はかわいいとは決していけないのに、人間はこんな猫にも情が湧いて何かしら食べ物をやるのだろうか。自分たちカラスには餌のひとつも分けてくれないというのに。

分けてくれないどころか、人間は自分たちを追い払おうとする。もういらないと捨ててある食べ物を少しもらおうとただけなのに、それでも人間たちは自分たちを追い立てる。

自分たちが食べることで、少しでもゴミが減って人間としても好都合であるはずなのに。人間は自分たちカラスを嫌がって、ゴミ捨て場にカラスが来ないように、網を張ったり色のついた袋にゴミをつめたりと工夫を凝らす。

そこまで嫌がられるようなことをした覚えは、カラスの方には全くないのだが、人間は何かとカラスに悪印象を抱いているようで、困ったものだ。

こちらとしては是非とも人間様と仲良くしたいのだが。

それはともかく。今は人間ではなく、目の前にいる猫のことで自分は困っているのだった。

でっぷり太った猫も、こちらを見てじっとしている。身体が重くて機敏には動けないらしい。じっとしたままだ。不恰好に何とか狭い塀に取まってはいるが、少しでもバランスを崩したらあっという間に地に落ちてしまうだろう。それくらい危なっかしい座り方をしていた。

さて、どうするか。カラスは猫から視線を逸らさずに考えた。

このままじっとしている訳にはいかない。かといって、すぐさま飛び立つというのもプライドが許さない。今自分がいる場所から飛び立つということはそのまま、目の前にいるでぶつちよの猫に対して白旗を掲げることになるからだ。それだけは嫌だ。こんなろまそうな猫に対して下手に出るなど、絶対にできない。

かといって、猫のいるところに強引に飛び移る勇気もまたカラスにはない。

猫は猫でこちらをじっと見つめたまま動かない。

あちらも自分を警戒しているのだろうか、とカラスは考える。

一体、脳内ではどんな戦略を立てているのか。脅して自分を遠ざけるか、はたまた自分から退散するか。

後者はまずありえないだろう、とカラスはまた思う。外見の割にはプライドの高そうな目つきをしているのだ。いや、猫というのは総じてプライドの高いものだという思い込みがこのカラスにはあったのかもしれないが。

兎に角、小さな冷戦状態が小さな町の小さな一角で繰り広げられていた。

傍から見れば、どうということもない、小さな小さな出来事ではあるが、この両者にとっては――少なくともカラスにとっては――平和な日常に突如として紛れ込んできた危機であるのだった。

カラスは困りに困って、試しにアホウ、と一声鳴いてみた。

こういう時程、自分の鳴き声をありがたく思えることはないだろう。まさに、今自分が口にしたい言葉だったのだから。カラスの一声を聴くと、猫はお返しといわんばかりに、ぶにゃあ、と鳴いた。

ぶにゃあ、だって、とカラスは内心想った。

なんて間抜けな鳴き声なんだ。外見にぴったりだ。

猫というのは、太ったらこんなにも間抜けな声が出せるものなのか。そう思うと、今まで行動をとりかねていた自分が何だか情けなくなってきた。

自分は、こんなどうでもいいやつに対してなんの対処もできないでいたのか。たかが、肥満の猫一匹じゃないか。こんなことでひるんでいてはカラスの名が廃る。カラス仲間にはメタボの奴など一羽もいないし、ぶにゃあ、なんてアホ丸出しの鳴き声を上げる奴なんてこれまた一羽だっていない。全く、猫など恐れるに足りん。自分はなんて愚かだったのだ。

強行突破すれば済む話ではないか。

自分がそちらに飛び移ろうという素振りを見せたら、このお間抜けな肥満猫は慌てて逃げていくに違いない。このカ

ラス様が猫ごときに負けるはずなどないのだ、とカラスは猫の鳴き声を聞いてから急に洪水のごとく自信が胸のうちにあふれ出し、今なら何でもできる気になっていた。そこで、行動に移すことにした。

低いトタン屋根の上を一步二歩と飛び跳ね、さあいざ猫の方へと飛び移ろうとしたその時だった。

「そこの者、止まれい。我はおにゃんこ様であるぞ。無礼な振る舞いはするでない」

いきなりメタボ猫が横柄に声をあげたので、カラスはびっくりして飛び移ろうとしたバランスの悪い姿勢のまま動きを止めてしまった。

なんだ、今の声は。いや、目の前の猫の声だということは言われるまでもなく分かっている。しかし、なんだ、今の声の横柄さは。なんだ、おにゃんこ様とは。カラスは、突然のことに動揺して、アホウとすら鳴けないでいた。

「うむ、よろしい。止まったな。それでこそ我が下僕」

下僕だって！ いつの間に自分はこいつの下僕になったのだ。

「なんだ、いきなり。ひと……じゃなかった、カラスのことを下僕だとか言いやがって。俺がいつ、どこでお前の下僕になったというのだ」

「今、ここであつたのだ」とおにゃんこ様。「我がそう決めたのだからな。お前は正真正銘、我の下僕だ」

アホウだ。カラスは思った。こいつは、間違いなくアホウだ。

「何故、お前が決めたからって理由だけで、俺がお前の下僕にならなくちゃならないんだ」

「こら、口の利き方に気をつけろ」おにゃんこ様が憤慨して言った。「我は偉大なるおにゃんこ様であるぞ。身分をわきまえるんだな、下僕の分際で」

カラスは頭にきた。

「だから、どうして俺がお前の下僕にならなくちゃならないんだ。お前はただの猫だろう」

「我はおにゃんこ様である。猫のなかの猫。動物のなかの動物の王者。偉大なるおにゃんこ様の決定には、何匹たりとも逆らえないのであーる」

やっぱり、アホウだ。とまたカラスは思った。こいつはどっからどう見ても、誰が見てもアホウでしかない。

「仮に、おにゃんこ様という存在があつたとして」カラスはすっかりあきれ返って言った。「どうしてお前がおにゃんこ様だってことになるんだ」

これを聞くと、おにゃんこ様はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりに胸をそらして、ふん、とわざとらしく息を吐いた。

あんまり横柄に胸をそらしたのだから、バランスを崩して塀から落ちそうになった。しかし慌てて塀に四本の足の爪をしっかりと引っ掛けたので、何とか落ちずに済んだ。

「それはだな」とおにゃんこ様。「さっちゃんが、我にそう言ったのだよ。我は人間によって任命されたのだ。だから我はおにゃんこ様なのだ」

「さっちゃん？」

どこかで聞いたことのある名前を耳にして、カラスは首をかしげた。

「我に食事をもってきてくれる、優しい子だ」とおにゃんこ様は答えてにんまりと笑った。

もしかして、とカラスは考える。もしかして、さっちゃんってあの子か。赤くて四角い鞆を背中に背負って、黄色い帽子を頭に被り、毎朝ガッコウとやらに通っている、あの小さな人間。まだ分別もなさそうな、未熟者。確か、他の人間にさっちゃんと呼ばれていたような気がする。こいつは、そんな人間に言われたからってだけで、自分を身分のある者だと思い込んでいるのか。

なんておめでたい奴。

カラスはこれ程呆れたことはいまだかつてなかった。

ぶにゃあ、とおにゃんこ様が鳴いたので、カラスは思考を中断させた。

「主を無視して思索に耽るとはいいい度胸であるな」

「だから、お前の下僕になった覚えなんてないって」

「だから、我がお前を下僕としたのだから、お前は我の下僕なのだよ」

少しばかりいらついた様子を見せながらおにゃんこ様が言った。「何度も言わせるでない」

それはこっちの台詞だ、とカラスは心の内で毒づいた。誰が好き好んでこんな奴の下僕になどなるものか。俺は俺だ。こんなアホウな奴の下僕でもなんでもなし、自由に生きる誇り高きカラス様だ。こんな奴に構っている時間が勿体ない。早く立ち去る方がいいだろう。そう思ってカラスは翼を広げた。

「待て、どこに行くつもりだ」

気づいたおにゃんこ様が慌てて言った。

「行くでない。我のもとにおるのだ」

誰がこんな奴の言うことを聞くものか。カラスはばさりと翼をはばたかせて飛び立とう、とした、はずだった。

「な、何だ？ どういうことだ？」

カラスは驚いて思わず声をあげた。足が今立っている場所と接着剤でくっつけられたかのように、びくとも動かないのだ。

これは、どういうことだ。

いくら羽ばたいてみても、動けない。足だけがまるで言うことを聞かない。自分の身体でなくなってしまったかのようだ。

「ふむ、ちゃんと言うことを聞いたようだな。身体は実に忠実だ」

とおにゃんこ様は満足げに頷きながら言う。羽ばたくのを諦めたカラスは訳が分からず、おにゃんこ様を困惑した目で見やる。これは、こいつのせいなのだろうか、という考えが聡明なカラスの頭を掠め始めていたのだ。こいつは、何か妖術を使うのかもしれない。

「さて、お主が大人しく我の言うことを聞く気になったところで」

おにゃんこ様は勝手に話を進めているが、カラスは言うことを聞く気になった訳では断じてない。ただ、身体だけがおにゃんこ様の言葉に従っているまでだ。これは、自由を生きてきた頭の良いカラスにとってかなり屈辱的なことだった。しかしそんなことはおにゃんこ様にとっては関係のないこと。

「我がお前のような鳥を下僕にしようと思ったのには、ちゃんと訳があるのだ」

訳などどうだってよかったが、とりあえずここはおにゃんこ様の言うことを聞いておくべきかもしれない。カラスは思った。大人しく素直に言うことを聞いていれば、それだけ早く解放されるかもしれないし、たとえこいつに自分を解放する気がなかったとしても、従順なふりをして隙を見つけて逃げることができるかもしれない。

「訳ってなんだ」

「まずはその口の利き方を改めろと言いたいところだが……、いいだろう。我は心が広いからな。特別に大目にみてやることにしよう」

おにゃんこ様は、カラスが自分の発言に興味を持ったと思っただけで、うきうきして言った。そして、カラスから空へと視線を逸らし、恍惚とした表情を浮かべた。

「我は、空を飛んでみたいのだ」

「空を、飛びたい？」

猫には、特にお前のようなやつには到底無理だ、という言葉が危うく吐き出しそうになったが、カラスは何とかこらえた。

「そうだ。我は猫なのでな。お前たち鳥のように、翼をもたない。だから自分では空を羽ばたくことはできないのだ」

そりゃそうだろうな、と内心で思う。

「しかし、だな。翼がないからといって空に憧れる気持ちが萎える訳ではないのだ。むしろ、逆に強くなってくるものなのだよ、憧れというのは。困難なことならば、なおさらな。我は、どうしても空を飛びたい。自分に翼がないのなら、誰かの手を借りるまで。噂では、我ら猫と同じく翼をもたない人間が空を飛ぶというではないか。それならば、我にだって飛べるはずなのだ。だから、お前を我の下僕にしようと思ったのだ」

それならそれで、わざわざ自分を下僕にしなくても、ただ頼みごとをすれば良かったのに、とカラスは内心思ったがそれを口にはしなかった。

なにせ、こいつはアホウなのだ。何を言ったって無駄なのだ、と既におにゃんこ様の性質をその鋭い目で見抜いているカラスであった。

しかし問題は。

どうやってこのデブ猫を空に運ぶか、ということである。

どう考えたって無理だ、とカラスは思う。

なにせ、本当にこのおにゃんこ様とやらはぶくぶくと太っているのだ。ただでさえ身体が大きいのにその上太っているときたら、背の肉を掴んで持ち上げてやることもできない。カラスは今まで重いものを足でつかんで運んだことがないので、おにゃんこ様が、自分を持ち上げろなどと言い出しはしないかと不安であった。

「だから、ほれ。早速我に空を飛ぶということを体験させてくれい」

おにゃんこ様はカラスの意志などお構いなしに命令した。

すると、どうだろう。身体が意志に反して勝手に動くではないか。

カラスは内心あたふたとしながらも、表面上は冷静を保って自分の身体が一体どのようにしておにゃんこ様の要望を叶えてやるのか見届けてやろうと、まるで他人事のように構えることにした。

黒い羽毛に包まれた身体は、ひよいと身軽に動いておにゃんこ様のすぐ傍まで来た。そしてそのままおにゃんこ様の上に飛び乗って、背中を驚掴みにするかと思いきや、ぐぐっと屈む姿勢を取った。

ここに来てカラスはあせった。まさか、このデブ猫を背中に乗せる気なんじゃあ。

そんなの、無理だ。いくらなんでもこんなデブ猫を背中に乗せたら、羽ばたけないどころか自分の身体がつぶれてしまう。

しかし身体はそのまさかを実行しようとして、猫が上に乗りやすいようにと低く屈んでいた。猫はその意図を理解し、もぞりと大儀そうに動いて背中に前足をかけた。

小柄なカラスは嘴をくいしばりながら、今まで経験したことのない重みに耐えた。

「なんと滑りやすい毛であることか！」おにゃんこ様は文句を言った。

毛じゃない。羽根だ、と心の内で訂正しながら、やはりカラスは重みに耐えなくてはならなかった。本当にこの猫は重たかった。カラスにとっては、背にこんなデブ猫を乗せるということは拷問に等しいことであった。

おにゃんこ様は、苦勞しいしい、なんとか小さな黒い背中の上に収まった。

「さあ、乗ったぞ。今すぐ飛び立つのだ！今すぐ我に風を感じさせるのだ！」

無理だと思っていたが、おにゃんこ様が命令を下すと不思議なことに、カラスの内には力が満ち溢れ、まるで重みなど全く感じていないかのように、身体はすっと立ち上がった。そうして翼を左右に広げ、一回二回三回……とゆっくり羽ばたく。

本当にこんな奴を背中に乗せて飛べるのだろうか。カラスは不安でいっぱいだったが、身体はあくまで冷静に構えている。

カラスの足が、硬い塀を力強く蹴った。

そして次の瞬間には、いつものように空のなかに飛び込んでいた。

なんだ、俺ってば、やるじゃないか。こんなに重たいやつを背中に乗せていたって、いつも通り飛べるんだから。カラスは得意になった。

それにしても、えらく急に軽くなった気がする。カラスはふと不思議に思った。

背中にもいつものように風を感じるし。おかしいな。背中にはあいつが乗っているから、風など感じないはずなのに

いや、それにしても空を飛ぶとは全くいい気分だ。何回飛んだって、この感覚は飽きることがない。飛ぶということは、まさに俺の天職だ、とカラスは段々愉快になってきて、しまいにはおにゃんこ様のことなど綺麗さっぱり忘れて去ってしまった。

先程おにゃんこ様のいた塀の下で、何かおおきな丸いものがぴくぴくと動いていることに、案外早く自由を得たカラスが気づくことはなかった。

\*\*\*FIN\*\*\*